１．４　学年毎の年間教育目標・方針の実施状況

◎１学年・２学年共通　　低学年教育委員会委員長　　板野　　哲

○　運営目標の実施状況とその成果

１　ショート・ホームルームの実施

－始業１０分前の登校を促し、第１時限から授業に集中できるよう姿勢を整える。－

第１学年では全日、第２学年では週３日、年間を通じて実施した。

２　学生の授業出席の改善

－毎日の出欠、遅刻、早退を調べ、指導し、改善をはかる。－

専門科目の出欠連絡を求め、担任が指導に努めた。科目によっては連絡が途絶えるものもあったが、第１学年の皆勤者は前年に比し１４名増加した。また、第２学年の皆勤者は１名減ではあるが、第１学年次に比し６名の増加を見た。

３　教室の清掃・整備の徹底

－教室環境を毎日整備し、授業への集中を促進する。－

可能な限り清掃・整備に努めたが、クラス間にやや差が出た。

４　予習・復習の実行促進

－学力の修得のため、、予習、復習の習慣化を目指す。－

通常は担任を通じて指示した。また、夏季休業期間には各教科から宿題を課すようにした。

５　アドバイザーによる指導の促進

－勉学意欲を増進させるために、学生への指導をより密なものにして行く。－

早期にアドバイザー担当者の連絡を求めて指導の促進にあたったが、学科の対応には差が出た。

６　オフィス・アワーの活用

－オフィス・アワーの活用を通じて、学力の修得を目指す。－

担任を通じて指示し、活用を促した。

７　読書や活字に親しむ機会の増進

－文献や書籍を紐解くほか、図書館の利用を促し、学力の修得と視野の拡大を目指す。－

担任が引率し、図書館の利用を指導した結果、図書の帯出冊数はクラスにより差があるものの、前年に比し飛躍的に増加した。

８　学級担任会の開催

－随時開催し、情報交換を通じて、教育のあり方を検討する。－

低学年教育委員会の折りに開催し、情報の交換と指導方法の検討を行った。

○　総括的な評価と課題

進級不可者の数は、留年未経験者の場合、第１学年では６名、第２学年では１４名であったが、前年に比しそれぞれ２名減少した。また、皆勤者が増加したことを併せ見るならば、取り組みは評価される。

しかし、清掃・整備の徹底は制度化が必要である。また、専門科目の出欠連絡やアドバイザーについては、学科の協力が不可欠である。

◎３学年

学級担任	機械工学科	豊田　幸裕
	電気工学科	大村　　泰
	電子制御工学科	栗原　義武
	生物応用化学科	間淵　通昭
	材料工学科	松原　靖廣

○　運営目標の実施状況とその成果

１　欠課数の削減

(1) 欠課数の削減を目標に指導を行う。

【成果】

学科や年度ごとの事情があり、昨年と単純に比較した数値を比較するのは意味があるかは疑問であるが、数値的には全般的に向上した。

	C	Z	E	D	M
H14 平均欠課数（／人・年）	56	29	44	35	67
H15 平均欠課数（／人・年）	34.2	30.6	54.1	27.2	35.2
H14 皆勤者数	6	14	9	12	5
H15 皆勤者数	6	4	13	15	6

３Ｍ：欠課数の多い学生（2 名）について、1 名は月曜日の遅刻、欠課が多いため調査し、アルバイト時間が多いことが判明。親の協力を求め対処し、一旦は好転した。が、授業に付いていけないとの理由で、後期中間から再発。寮生であるが，留年のため４年寮にいる。

したがって、同級生の交友が少ないことなども原因と考え、教官室への来室を促し、閉塞感を打ち破るにはどうしたら良いかを話し合ったが、好転はしていない。もう 1 名は松山の自宅から毎日列車通学なので、一時間目の遅刻が多かったが、本人の努力と親の協力により、徐々に改善がみられた。

３Ｅ：後期から不登校１名、途中不登校ぎみになった学生１名、いくら指導しても効果の無い学生３名等々があり, 総合的に見て欠課数を少なく出来ていないと思われる。ただ, ７～８割の学生は８時３０分以前に登校できており、朝のショートホームによって昨年度より遅刻が減った学生もいる。

３Ｄ：学年の最初に、クラス目標および学年目標として、欠課時数を減らすことを挙げており、この目標に協力してくれる学生により、皆勤者数が数名ながら増加していると思われる。また、昨年度欠課が多いことが理由で留年してしまった学生がいたため、頻繁に保護者と連携協力することにより、前期ほとんど欠課なく、欠課オーバで留年という事態にはならず､少なくともこの学生に関しては欠課数を削減することができた。逆に、後期に入って体調をくずし、原因が分からないまま欠課時数が多くなり、結局入院するに至り、かなりの科目数を欠課時数 3 分の 1 に緩和しても欠課オーバとなってしまった別の学生のケースもあった。

３Ｃ：皆勤者が少なかった昨年よりは皆勤者数では増加しているが他学科と比較すると少ない、欠課数の非常に多い者が約 2 名（進級の意欲のなくなった者）。一貫、継続的な指導がなかったと反省している。

３Ｚ：去年より欠課数が相対的にやや少ない程度であった。欠席数のほとんどが、数人のメ

ンバーでしめている。それを集中的に指導すべき必要やその手法に改善の余地があった。

(2) 朝のＳＨＲを実施

主に学生への連絡・注意、または学生からの報告・意見提出を主体とし、学生からのシグナルをなるべく早く気づく機会とする。強制参加にするかは検討。

【成果】

Ｅ以外は、特に内容を定めず、学生にも非強制で実施した。E では学習課題を与える形で実施した。

３Ｍ：早く来る学生（前半 1/3 程度～後半４名程度）とのコミュニケーションはとれた。授業時間への組み込みあるいは強制でなければ，学生へのメリットがなく，継続的な活動は難しかった。

３Ｅ：朝の挨拶の実施はほぼ完全に出来た。8:10 登校を奨励。約 8 割の学生が 8 時 30 分までに登校（前期平均 8:25，後期は年明けから 2 ～ 3 分後退）。真面目な学生は、朝の課題により電気の基礎が身についている。

３Ｄ：出張等の数日を除き、ほぼ全日実施できた。前期には半数以上の学生が 8：30 までに登校していたが、後期には 3 分の 1 程度まで人数が少なくなってしまった。大部分は、連絡事項、注意事項の伝達等の利用に役立った。

３Ｚ：強制はせず実施した。担任は、1 年間、すべて顔をだすことが出来た。連絡、注意、報告、意見提出の場として意義が十分にあったと担任は感じている。8:30 までにかならず来ている学生は最初汽車通学生がほとんどだったが、後半になると他の通学学生も混じって増えてきたようである。

３Ｃ：早く来る学生、朝勉強する学生とのコミュニケーションは十分取れた。学生側も担任が朝来ることで、担任への連絡はいち早くとることができ、相互にとって早い対応につながった。一方で、強制参加のような形にしなかったせいで、担任からの「全体への」連絡や訓示としては意味が少なかった。担任個人の成果としてはとりあえず 1 年間継続できたということだけのようであるが、３Ｅでされているようなことをするには相当の継続的な努力が必要と感じている。

2　特別活動に公共心を養う指導を取り入れる

昨年実施した清掃活動などにさらに積極的にとりくませる。

【成果】

全学科の担任が連携して、前後期の２回特活の時間を利用し、複数学科で共同での学校内外の清掃活動を行った。

実施方法や時期などには改善すべき余地（日程および天候の関係で全学科統一は出来なかった）があったものの、学年全体で取り組んだということで、一定の成果はあったといえる。これを積極的に進めていくと、校外の清掃ボランティアなどの行事につながるだろう。

また、特活の時間において、環境保全委員会の協力を仰いで環境に関する講話を全学科で実施した。

その他３Ｅでは、道徳的な内容の読みものを読ませる、３Ｚでは、環境・マナーなど外に向かっての話題も取りいれた。

3　担任間の連携の強化

月１度は行う。やむを得ない事情でmail会議とするときには、全員の発言を前提とする。
【成果】
毎月の完全実施は無理であったが、進路相談、清掃活動、研修旅行などの議題を、担任会議あるいはメール会議にて議論し、情報交換ができ、それぞれ担任の指導上で有意義であった。

４　その他の成果

３Ｅ：研修旅行を、銅山の家自然の家へ徒歩にて１泊２日の行程で実施した。実施前は研修旅行に対し、肯定 30 %、否定 70 %であったが、実施後は肯定 60 %，否定 14 %となり、実施してよかったとの意見が多かった。

３Ｃ：進路についての考えを具体化する機会を与えることを目的に、学科の教官に研究室案内（名目は４年生からの化学コース・生物コースの選択に関する情報提供）や専攻科の説明の機会を設けたが、今年の学生たちには意識を高めるよい機会になったように思う。また、留学から帰った学生の海外生活報告や海外交流プログラムで来校した外国人学生との交流から、外への意識を高める工夫をしてみたが、十分な成果とまではいかなかった。

３Ｍ：研修旅行として Spring-8 施設を訪問。教室以外の体験の場が、学生の心の琴線に触れる機会が多いと感じた。「ああいう仕事に就きたい！」と、将来に夢を持った学生も出たこと、専門学校に行くことにしていた学生が、進路変更を取り止め５年まで頑張りたいというきっかけにもなったようだ。

３Ｍ：進路相談についての取り組み
担任自身の企業での経験を、「働く」という意味を、折に触れ説明する機会を作った。また、５年生の先輩，国立大学編入内定者、就職内定者にそれぞれ、今の進路を決めたきっかけを説明させた。学生からは、活発な質問が出て、自分の進路を決める意識を高めるきっかけになったと思われる。「高専で勉強することに誇りを持つ、高専にきた意味を改めて考える」ということを、特別活動の時間の中で、折に触れて話してきた。昨年末から今年にかけて、少しずつこのようなことを考え始めている学生が増えつつあるという感触をもっている。

４Ｄ：４年生に向けての準備
特別活動の時間に、４年生の実験(ミニロボコン電子創作実習)を担当している出口教官に実習発表会の様子のビデオを見せてもらい、話をしてもらった。また、４年生のインターンシップ発表会にも３年学生を参加させた。全学生に対しての動機付けには至らなかったが、４年生になるまでの準備として役立ったと感じた学生もいた。

○　総括的な評価と課題

３年生については､生活面の指導と将来への目標設定をもたせることの 2 点が重要である。
前者については、低学年からの一貫・継続した指導が必要であるのに加え、学科としてクラスが形成される・５年間の中間となる・進路変更を考える学生が出てくるなど３年生特有の状況を考えつつ、学科としての教育および指導方針をもち、また学年である程度統一性をもった方針と方法をもつべきである。と考える。
後者についても、学生が目標を設定しにくい中間の期間であるからこそ、早くから将来への目標やそのための計画をもたせることが非常に大切ではないか。生活や学習面での問題をもつ学生は、将来へのビジョン・希望をもたない（あるいは失った）者が大多数であることからもその必要性が伺える。

以上の点から考えて、年間の目標を設定していくべきであると思われる。本年を振り返ってみて、「欠課数の削減」に関しては、数値目標の設定が難しいが、常に最初に努力するべき項目であると考える。「ＳＨＲの実施」に限らず、日常の生活指導に関する目標の設定も必要となる。なお、「担任間の連携」は、情報交換の場としても、学科間の指導方針の統一化という点でも、非常に有意義であったので継続していくべきと思われる。

◎４学年

学級担任　機械工学科　松田　雄二
電気工学科　尾西　康次
電子制御工学科　今井　伸明
生物応用化学科　牛尾　一利
材料工学科　相根　博道

（目標）
１．クラスの団結力・モラルの向上
２．就職・進学に対する将来計画の具体化
３．専門的知識と社会への適応能力の育成

（方策）
１．クラスマッチ等の学校行事への全員参加（担任を含む）を目指す。
２．日直業務の完全実施とその充実を図る。
３．インターンシップへ全員派遣（既修得者を除く）とその充実を図る。
４．成績や出席状況が思わしくない学生に対する指導を強化する。
５．実力試験の結果やＳＰＩ適性検査等の情報を提供し、進路について、今何をすべきか考える指導を行う。

○　運営目標の実施状況とその成果

１．４年生となりクラスも少し落ち着きを感じさせ、クラスマッチなどもスポーツの得意な学生達がクラスを引っ張るなど､友人関係等も良好な方向に向かってきたように思われる。また、日直、掃除当番や校内除草作業も､概ね実行できた。

２．インターンシップは全員が参加し、報告書の提出や報告会を行った｡企業や大学等の雰囲気を直接に感じ、精神的な成長、社会観の芽生えも感じられる。本校での企業説明会、就職関連の新聞記事（掲示）等を通して、自分の進むべき方向とも関連させて様々な印象を持っている様子である。

　就職関連本を教室に置き、またＳＰＩ検査の一部もクラスで試みたり､進路や社会に対する関心を高めるような試みを行い、進路選択に対する指導を心掛けた｡本校での企業説明会にも熱心に参加し、強い関心を示しているように感じられる。

３．成績について懸念される学生に対しては、ともかく欠課時数が増えないように本人に声をかけ、注意や励ますのみならず、家庭への連絡も心掛けた。出席状況は悪くないが成績のふるわない学生も数名いる。一方、授業時間以外での指導などにより、今まで成績不振だった学生でもかなり成績を伸ばしてきている学生もいる。高学年になって本人の意欲が増したことが良い結果につながっており、今後もそうした学習意欲を継続させるような指導を行っていきたい。

○　総括的な評価と課題

　インターンシップや本校での企業説明会は社会に対して目を向ける必要性や自覚を促す良い機会となり、進路に対する認識は高まっていると思われる。また一面で、自分の希望を明確にし、具体化する段になると、なかなかに容易でない様子も見受けられる。インターンシップは派遣先の確保でなかなかに難しい面もある。企業説明会では専攻科の認識度が低いこ

とを感じた学生もいるようである。電子制御工学科では、本年度も工場見学を行い、実際の企業の現場の方の生の意見を聞く機会を持たせた。現場での仕事の様子やそうした企業の方の生の意見を聞かせることで、社会の実際の仕事の様子を肌で感じ取らせる良い機会になったと思われる。

出席状況の思わしくない学生は特定化する傾向もあり、家庭との連携も有効な方法の一つと思われるが、家庭の仕事等により連絡の取りにくい場合もあり、なかなかに実効もあがりにくい。

◎５学年

学級担任	機械工学科	北住　順一
	電気工学科	皆本　佳計
	電子制御工学科	榊原　久司
	生物応用化学科	早瀬　伸樹
	材料工学科	志賀　信哉

（目標）

５年生全員卒業と全員の卒業後の進路決定

（方策）

１　欠課の多い学生及び受講態度の良くない学生への注意と場合によっては保護者への連絡等による連携を図る。

２　成績不振者への注意と保護者への連絡等による連携を図る。

○　運営目標の実施状況とその成果

機械工学科

３０名が卒業の予定、１名が卒業できない。

進学希望の１名の進路が決定していない。次年度試験を受ける予定である。

電気工学科

３２名が卒業の予定、1名が卒業できない。来年度やり直すとの意思確認はできている。

就職希望の１名の進路が決定していない。家庭との相談はできており、本人が地元で就職先を探すことになっている（ご家庭の希望である）。

電子制御工学科

就職希望者 19 名全員内定

進学希望者（16 名）については、部分留年生 1 名の進路が未定

反省点

欠課の多い学生など上記目標達成のために注意が必要な学生については、定期試験の結果が出たときなど折々に面談して注意を喚起してきたが、部分留年生は自分の進路について安易に考える傾向があり、2 回編入学試験を受験したが、勉強不足のまま受験し、大学編入学を諦めざるを得ない状況になった。

生物応用化学科

５年生全員卒業。

卒業後の進路については、卒業予定者３１名の内１６名が進学希望者で全員進学先が決定している。就職希望者１４名についても全員の就職先が決定している。

残り１名については、ワーキングホリデー制度を利用した語学研修を希望し、７月からオーストラリアで研修を行う予定である。

材料工学科

卒業：１名不可

病欠のため。今年度は体調回復を優先し、登校できるときだけ出席した。16 年度卒業を目指している。

進路：就職希望１名未定

２月末に医療事務資格試験を受験した。合否結果は３月末。すでに本人宛にある病院からオファーがきている。

○　総括的な評価と課題

合計３名が卒業できなかった。病気などのやむをえない者もいたが早めの指導が必要であった。

進路に関しては、学科が一生懸命めんどうを見ても家庭の理由で会社を決めない場合があったなど、難しい問題が残った。次年度からは、きちんと家庭との契約を結ぶ形で世話をすべきたと考える。